京都大興寺関帝像について

陳　　莉　　莉

The statue of Kantei at Daikoji Temple in Kyoto

CHEN Lili

The Kantei faith in China developed greatly during the Song-Yuan Dynasty, and the imperial court's posthumous rank became a "King" through the "Hou" and "public". The form of Guan Yu has been fixed with the development of literary works such as storytellings, ghost novels, Yuan Zaju operas, Yuanqu,and novels. Although the Yuan dynasty's Guan Yu paintings are slightly different in shape, the Danfeng eyes, Jujube face, and long beard is already established at this time. However, the statue of the Kantei ,which is said to have been handed down from the Chinese Yuan Dynasty, is different from this one. The purpose of this paper is to , through the analysis of the Severnt God and those belongings ,compare the shape of Kantei in Chinese Song-Yuan Dynasty, the depiction of storytelling in the works of literature and the statue of Kantei of the DaikoJi Temple, and to examine the image of the Kantei in the DaikoJi Temple, which is said to be the oldest in Japan.

Keywords：Kyoto Daikoji Temple, The statue of Kantei, Takauji Ashikaga, The Kantei faith

キーワード：京都大興寺、関帝像、足利尊氏、関帝信仰

はじめに

中国の関帝信仰は時代の流れに即して発展し、華僑の海外移住と共に世界へ広がっていった。明末清初に密貿易商人や日本に避難してきた文人たちは次々に九州及び周辺諸島に居留してきた。彼らの移住と共に長崎の唐寺が次々と創建され、中国の民間信仰も日本に伝わった。関帝信仰はその中の一つである。しかし、日本における関帝像に関する記載は南北朝時代に遡ることができる。

京都の左京区に大興寺（芝薬師）があり、1196年に後鳥羽上皇の勅願により創建された。最初は天台宗であったが、南北朝時代に臨済宗の禅刹に改めた。日本において関帝が意識されるようになるのが足利尊氏の頃であったとされている。足利尊氏が吉夢をみて、中国から関羽像を求め、大興寺に安置して関帝を祀ったのが始まりとされる。当初は武神として崇敬され、寺院守護の伽藍神としても信仰された

が、作者・年代ともに不詳である。だが、この関帝像は明清以降の関帝の像と相当異なるどころか、宋元時代の関帝図像とも大変な相違があるため、この神像は本当に関帝の像であるかと疑う人も少なくない。日本の多くのブログでは大興寺の関帝像を疑っており、後ろの脇士もただの童子であると考えている[1)]。一方、二階堂善弘氏は大興寺における関帝像に関して『關公與足利尊氏』[2)] において、大興寺の神像は関羽、関平と関興ではないかと主張している。本論は日本における大興寺関帝像について再検討したい。

一　京都大興寺と関帝像

大興寺のホームページでは大興寺の関帝像は日本最古のものとされ、関羽像について以下のように紹介している[3)]。

> 「関帝聖君像（関羽像）」は、中国・北宋（960～1127）より貿易船で伝来したとされ、日本最古という。また、尊氏が元より取り寄せ、戦場での守護神にしていたともいう。玉座に坐し、両手を膝上に載せ構える。服に朱の彩色が残る。尊氏は一宇に像を安置しという。かつては関帝廟に祀られていたともみられている。中国では商業、財力の神であり、商売の神として華僑に崇拝されている。また、当初は武神として崇敬され、寺院守護の伽藍神としても信仰された。作者、年代ともに不詳。「関帝」の扁額があり、「南宋武幹謹書」と刻まれているという。像高８寸（24.2㎝）。彩色木像、玉眼入。脇士は関羽の子の「関平立像」と「関興（周倉）立像」による。彩色木像、玉眼嵌入。

この紹介によれば、この関羽像の由来については、北宋より貿易船で伝来した、あるいは足利尊氏が元より取り寄せたという二つの説がある。また、関帝廟に祀られていたと述べられるが、どこの関帝廟であるかは記されていない。この関帝像は彩色木像で高さ24.2センチメートルであり、彫刻者、彫刻年代などは不明である。脇士は関興かあるいは関平と周倉かは明確になっていない。

大興寺は建立当初には天台宗の寺院であったが、後に臨済宗東福寺派になり、現在の本尊は薬師如来である。本来関羽信仰とは関係がなかったが、足利尊氏（1305～1358）が戦の守り神として中国から入手し、携行していたものが、のちに何らかの縁で大興寺に安置させたそうである[4)]。

１）たとえばネットブログ『三国与太噺』https://akanisin.hatenablog.com/entry/20140920/1411151758

２）二階堂善弘「關公與足利尊氏」（『道教学刊』、2019.1）177-186頁。

３）https://kyotofukoh.jp/report1206.html

４）「京都の仏像：211関帝聖君像／京都」（『毎日新聞』Webサイトの記事 http://mainichi.jp/feature/news/20130502ddlk26040580000c.html）

図１　大興寺関帝像と脇士[5)]

二　宋元時代の関帝形象

関羽の神格化の動きは隋の頃まで遡り、関羽が仏教の伽藍神に封じられたという。唐の時代、関羽は民間信仰の世界では、まだ恐ろしい冥界の鬼将であった。宋元時代になると関帝信仰は大きく発展した。北宋時代になって、ようやく道教と関羽を結びつけるような説話が現れ、民間信仰の鬼将から道教の神将に採用された。それに、宋代から朝廷による爵位の追贈も始まりつつあり、関羽は「侯」から「公」を経て「王」になったことがよく分かる（表１）。

表１　宋元時代における関羽の爵位追贈表

時代	授与皇帝	年　代	爵　位	原　典
北宋	徽宗	崇寧元年（1102）	追封忠恵公	『関聖陵廟紀略』二[6)]
	徽宗	大観二年（1108）	追封武安王	同上
	徽宗	宣和五年（1123）	追封義勇武安王	同上
南宋	高宗	建炎二年（1128）	加封壮繆義勇王	同上
	孝宗	淳熙十四年（1187）	追封壮繆義勇英済王	同上
元	文宗	天歴元年（1328）	顕霊義勇武安英済王	同上

関羽の形象は各時代の文学作品により、相互に影響しながら定着してきた。三国志に関する異聞や伝説・伝承などは六朝時代から人々の間に語りつがれていた。「三国伝説」や「三国物語」が作られていくが、唐代までは決まった形象はなく、様々な志人小説や志怪小説の中に断片的に記録されているに過ぎない。北宋になると、町中で様々な民間芸能や講談や演劇が行われるようになり、その中で三国志の物語「説三分」が流行していた。南宋に朱子学が大成したことにより、『三国志』から続いていた魏正統論

５）前掲　二階堂善弘「關公與足利尊氏」

６）（清）王禹書『関聖陵廟紀略』（『中國道觀志叢刊續編』７、廣陵書社、2004年）155頁。

から蜀正統論に変わり、士大夫から民衆にかけて「尊劉貶曹」という思想がかなり深く浸透するようになり、蜀の武将であった関羽もこの追い風に乗り、その地位がかなり高められた。元代になると「説話」や雑劇が流行するようになり、「関大王単刀会」「関張双赴西蜀夢」などの雑劇作品は、三国物語や関帝信仰の流布に大きな役割を果たしていた。三国志の物語が一つにまとまった形で文字化された『三国志平話』の出版により、関羽の容貌についてはほぼ完成した。元末には、『三国志平話』をもとにして作り上げた『三国演義』が流行するにつれ、関羽の形象が定着するとともに、関羽の影響力や地位が徐々に上がってきた。

では、具体的な文学作品から関羽の形象を見てみよう。晋代陳寿の『三国志』には関羽の見た目に関する描写はなく、ただ諸葛亮の一言「猶如未及髯之絶倫逸群也。」[7] があるだけである。ここの髯は関羽の別称であり、髯は関羽の顕著な特徴であると言えよう。北宋の説話集である『大宋宣和遺事』に「一身绛衣金甲，青巾美须髯。」[8] とあり、容貌に関する描写もなく、ただ髯が美しい印象が残り、青い幘（頭巾）が新たに加わる。南宋の志怪小説集である『夷堅志』には「黄衣急足，面怒二多髯，执令旗，容状可畏。」[9] と述べられ、関羽に関する印象も髯ぐらいである。元代になると関羽の形象は益々明確になり、関漢卿の雑劇である『大都新編関張双赴西蜀夢』第三折「紅綉靴」の唱詞には「九尺躯阴云里惹大，三缕髯把玉带垂过」[10] とあり、関羽は三筋の長い髯が腰まで延び、しっかりとした体躯という形象が出てきた。関漢卿の元曲である『石榴花』にて「绛云也似丹脸若频婆，今日卧蚕眉瞅定面没罗。」[11] の唱詞があり、関羽は赤顔で臥蚕眉という形象が見られるようになる。元の至治年間（1321～1323）に刊行された歴史講談である『三国志平話』には「生得神眉凤目，虬髯，面如紫玉，身长九尺二寸，喜看『春秋左传』」[12] と描写されており、『三国志平話』によって関羽の容貌が具体化し、関羽の形象はこの作品より完成した。元末明初の通俗歴史小説である『三国演義』において「身长九尺三寸，髯长一尺八寸；面如重枣，唇若抹朱；丹鳳眼、臥蚕眉，相貌堂堂，威風凛凛。头戴青巾，身着绿色战袍，手拿青龙偃月刀，足跨追风赤兔马。」[13] と書かれる。元末明初まで、『三国演義』の普及につれ、関羽が丹鳳眼、臥蚕眉、赤顔、長髭という形象は定着し、広がっていった。明清時代の関帝像は殆ど『三国演義』に書かれた形象をもとにして、出来上がったものである。

また、関羽の図像よりみると、現存最古の関羽図は1909年西夏国のカラホト遺跡が発見された際に出土した金代義勇武安王位図である。その図から、金代の関帝信仰の状況を窺い知ることができる。まず、関羽を「義勇武安王」に封じたのは北宋の宣和五年（1123）であるため（表１）、この関羽図は1123年以降の作品であると推察できる。この関帝図は後の明清時代の関帝形象の確立に影響したと言えよう。関羽は丹鳳眼、臥蚕眉、五筋長髯の容貌と戦袍に巾幘という服装をしている。後ろには三人の脇士が控え、

7）陳壽撰、裴松之注《三國志》（中華書局、1982年）940頁。
8）佚名《新刊大宗宣和遺事》（中國古典文學出版社、1954年）15頁。
9）洪邁《夷堅志》（中華書局、1981年）782頁。
10）徐沁君校點《新校元刊雜劇三十種》（中華書局、1981年）９頁。
11）徐沁君校點《新校元刊雜劇三十種》13頁。
12）佚名《三國志平話》（上海古籍出版社、1955年）10-11頁。
13）羅貫中《三國志通俗演義》（上海古籍出版社、1980年）５頁。

左から印綬、「関」字の戦旗、青龍偃月刀を持つ。二階堂氏の分析によれば、義勇武安王の頃の脇士は、むしろ関平と関興を置くのが常であった。元以前の時期は関帝の配下神としての周倉はまだ確立していなかったという[14]。周倉という人物は、元代の『三国志平話』に初めて出現したのであるが、関羽とは無関係である。つまり金代の義勇武安王位図の時代では、周倉はまだ存在していないはずなので、後ろで大刀を持つ脇士は周倉ではないと考えられる。

図２　義勇武安王位図（金）

また、二階堂氏の指摘によれば、明に刊行された『三教源流搜神大全』の「義勇武安王位」の挿絵については、確実に関羽・関平・周倉という組み合わせになっている。しかし、それが基づいたはずの元代の『搜神広記』の挿絵については、いまひとつ判然としないと述べた[15]。ただし、以下の元代図像からみれば、元代の関羽図の造形は多少異なるものの、丹鳳眼、棗顔、長髭という形象はすでに定着していることは間違いない。

図３　三教源流搜神大全（元明）

図４　搜神広記（元）

14）二階堂善弘「関帝信仰と周倉」（『関西大学東西学術研究所紀要』47巻）79-81頁。

15）前掲　二階堂善弘「関帝信仰と周倉」79頁。

図５　往古為国亡躯一切将士衆（元）

図６　三国志平話・桃園結義（元）[16]

三　足利尊氏と関帝像

足利尊氏と関帝との関係が見られるのは関帝顕聖の説からである。江戸時代中期の『山城名勝志』第十三巻に芝薬師堂（大興寺）の関羽像に関する記録がある[17]。

関羽像

同縁起云、尊氏卿二夜の夢に如来告て云、今汝に百戦百勝の術を教へん、大元国に軍神を求て信仰すべしと、霊夢のごとく元朝に求るに、王関羽将軍の像を送らる、尊氏此寺の傍に安置し給ふ

元末明初、『恕中無慍記』（1309～1386）にも大興寺における関帝像について以下のように記している[18]。

京都将軍之世，遣使唐土求関帝像，従唐土得其像后，放京極芝薬師，一名大興寺。

『山城名勝志』と恕中無慍記の記載によると、足利尊氏が中国から関羽像を求めて、芝薬師（大興寺）に安置したという。だが、実際に戦場で祀られていたかどうかは言及されていない。関羽が武将として信仰対象となっていた記録は、臨済宗僧侶蘭坡景（1419-1501）が書いた詩文集である『雪樵独唱集』巻五に「武田左京亮文秀画像」なる賛に残っている[19]。

在昔後光厳院御宇、等持相公、於九州多々良濱、与南軍交鋒、傍有一英雄、提長刀為先駆、怪而問

16）図３、４、６前掲 二階堂善弘「關公與足利尊氏」

17）『山城名勝志』第十三巻（近世風俗・地誌厳書第十二巻、龍渓書舎、1996年）44頁。

18）瀧沢馬琴「燕石雑誌」『日本随筆大成』第２期（吉川弘文館、1975年）534頁。

19）玉村竹二『五山文学新集』第五巻（東京大学出版会刊、1971年）337頁。

之、則日蜀将関羽也、不幾南人敗績矣、凱旋之後、相親知神之所助、命工写我像、謂之甲冑之影、秘置京之等持、今所丹青、亦其摸、而其所持乃関羽刀也。

後光厳天皇の頃（1352～1371）に等持相公、すなわち足利尊氏が九州多々良濱で南朝軍と交戦した時、その傍らに関羽の肖像画を祭ったというのである。関羽の神助を得て勝利した尊氏は京都に旋後、画工に命じて関王像に模倣して「甲冑之影」という自己肖像画を描かせた。その画は等持寺に保管されることになったようである。この記録によると、戦場で守護神にしていたのは関帝像ではなく、関羽図であった。長尾直茂氏はこの「武田左京亮文秀画像」なる賛について以下のように分析している[20]。

足利尊氏が陣中に関王像を祭ったことが日本人が関羽を武神として祭祀の対象にした事例として最も早いものと見なし得るであろう。また、尊氏が関羽に戦勝を祈願した時期前後、すなわち鎌倉末期から南北朝初期にかけての時期に関王像はすでに中国から舶載されていたものと考えられる。……すなわち築前多々良濱といえば、すぐさま近接する国際貿易都市博多が想起されよう。博多が平安朝以来、日中貿易の窓口であったことは周知に属し、中世には博多周辺に「大唐街」と呼ばれる中国商人の居留地が形成されていたことに関しても諸家の指摘がある。してみると、尊氏が博多で中国商人よって舶載された関王像を入手、同時に中国の関羽信仰について伝聞したと考えることは強ち的外れとはいえまい。

田中尚子氏は「日本における武神関羽のイメージは大元皇帝のそれと重ねられることによって、そしてそれを引き継ぐ尊氏というラインが形成されることによって享受されたのではないだろうか。」[21] と指摘している。

また、『碧山日録』の中で、寛正二年（1461）二月一日条では西山慈済趙関という人物が手にした普庵印粛と関大王の二人が並んだ印像をもらったことも記録していた[22]。

趙関見寄一帖並普庵之印像、其帖曰、此印板、入唐者儲之、非此方刊、故印之以寄公、祝有護法之験云、像傍有関大王、持長刀、其貌甚壮異也、（略）

『碧山日録』は、長禄三年（1459）から応仁二年（1468）までの記事であるため、室町時代後期のこととなっている。関帝信仰は日本僧侶の間によく知られているが、呉偉明氏の説明によると、「日本的中世僧人仍未祭祀關羽，最早祭祀關羽的是一些武將及華商。（日本の中世には最初関羽を祭祀していたのは、僧侶ではなく、武将と華商であった。）」[23] と記しており、田中尚子氏の論証によれば、「尊氏が主な登場

20）長尾直茂氏『中世禅林における関羽故事の受容―「百万軍中取が顔良」故事と関羽所用の大刀をめぐる一考察』（『漢文学解釈与研究』５、2002年12月）53-54頁。

21）田中尚子『三国志享受史論考』（汲古書院、2007年）120頁。

22）太極『碧山日録』上（『大日本古記録』東京大学史料編纂所、岩波書店、2013年）153頁。

23）呉偉明「近世日本関帝信仰初探」（『道教研究学報：宗教、歴史與社会』第九期、2017年）187頁。

人物となる『太平記』は『三国志』の影響を受けているが、関羽は一度も登場しなかった。」[24] と述べる。足利尊氏（1305～1358）が活躍した時代は、中国では元朝末期にあたる。陳寿『三国志』の伝来は飛鳥時代後期まで遡るが、より本格的に愛好されるようになったのは江戸時代初期に『三国演義』の伝来以降のことであり、足利尊氏時代なら、せいぜい『三国志平話』や雑劇や説話などの民間芸能であったに過ぎない。元の天暦元年（1328）に文宗に「顕霊」との封号を賜り、「顕霊義勇武安英済王」の爵諡を送られたため、金代の平陽で刷られた「義勇武安王位」画（図２）や『三国志平話』の挿画（図６）が日本に伝わってきた可能性が高いが、尊氏の生きた十四世紀前半には、中国商人が舶載されてもそれほど大量ではないだろう。足利氏がなぜ関帝に興味を持つようになったのか、現存資料からでは不明な点が多い。

四　京都大興寺における関帝像

まず、大興寺における神像の容貌について考察してみよう。関羽の容貌は『三国志演義』の普及につれて定まっていき、一般に定着してきた。羅貫中の『三国志通俗演義』（また『三国志演義』、『三国演義』とも）では、関羽の容貌について[25]

> 身長九尺三寸，髯長一尺八寸；面如重棗，唇若抹朱；丹鳳眼，臥蠶眉，相貌堂堂，威風凜凜。頭戴青巾，身著綠色戰袍，手拿青龍偃月刀，足跨追風赤兔馬。

と描写されており、他の版本も多少異同があるものの、ほぼ同じである。伊藤晋太郎氏は「関帝の肖像は『三台万用正宗』巻三十「相法門」と『三才図会』身体七巻「人相類」の図から部位ごとに適切なものを選択し、あたかもモンタージュ写真のように一枚の紙の上に組み合わせることによって描かれているのだろう」[26] と指摘している。

図７　義勇武安王図（金）、『三国志平話』（元）、『搜神広記』（元）、大興寺の関帝像（元？）[27]

24）前掲　田中尚子『三国志享受史論考』18-21頁。

25）〔明〕羅貫中：《三國志通俗演義》（上海古籍出版社、1980年）５頁。

26）伊藤晋太郎『「関帝文献」の研究』（汲古書院、2018年）146頁。

27）https://kyotofukoh.jp/report1206.html

1　眼

図７の最初の三枚は金元時代の関羽画であり、それらの目の共通点は切れ長で目尻がつり上がっている。『三国志平話』では関羽が「生得神眉凤目」であるとし、『三国志演義』では関羽の目は「丹鳳眼」であるとする。『三台万用正宗』と『三才図会』のいずれも「丹鳳眼」は見えないが、「鳳眼」を載せている。金元時代から関羽の形象は『三国志平話』、『搜神広記』、説話などで定着し、『三国志演義』での関羽の形象をそのまま踏襲してきたことがわかる。これと比べると大興寺関帝像は、目が切れ長であるが、あまりつり上がってはいない。むしろ『三才図会』身体七巻「人相類」の「虎眼」か「獅眼」の形に近く、割合に穏やかな表情をしている。

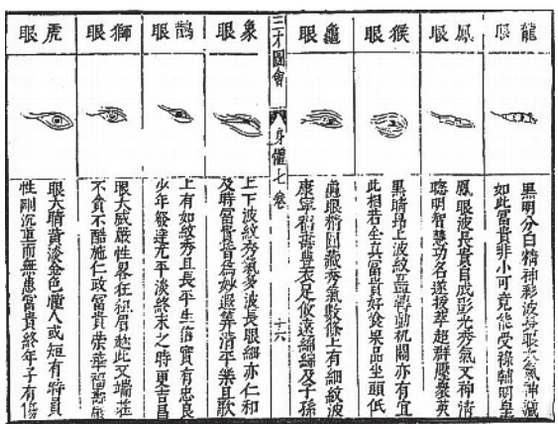

図８　『三才図会』身体七巻「人相類」[28]

2　ひげ

関羽というなら、赤い顔と長いひげの将軍であり、長いひげは関羽のトレードマークであり、美髯公とも呼ばれる。中国では古代から、長髯を美とする美意識と関わっているのだろうか。『荘子・列御寇』「八極」[29] には長髭は優れたこととして認識されている。漢代になると、ひげは王様に欠かせないものとされ、美髭の持ち主は超人的で偉大な人物であることを示す意味合いが込められているようである。また、『資治通鑑』巻一「周威烈王二十三年」の記録には「瑤之賢於人者五，其不逮者一也。美須長大則賢，射禦足力則賢，技藝異俗則賢，巧文辯惠則賢，強毅果敢則賢，如是而甚不仁；以五者賢陵人，而不仁行之，其誰能待之」[30] とあり、晋代には長髭が男子にとって才能と美のスタンダードとされていた。そのため、晋代の『三国志』「蜀書・関羽伝」に馬超が投降してきた時、関羽は馬超の才能が誰かと比べられるかと聞き、諸葛亮は「猶如未及髯之絶倫逸群也」と答えた。関羽の外貌については詳しく描写されていないものの、ひげが関羽の代称となり、その特徴が顕著に見える。

晋代の『三国志』、宋代の『大宋宣和遺事』『夷堅志』を経て、元代の「説話」や雑劇、『三国志平話』

28）前掲　伊藤晋太郎『「関帝文献」の研究』148頁。

29）《荘子·列禦寇》有“八極”之說、“八極”是指貌美、須長、身高、魁武、強壯、華麗、勇猛、果敢。

30）《国语・晋语九》125（中国哲学书电子化计划）https://ctext.org/guo-yu/jin-yu-jiu/zhs?searchu

『三国志演義』まで美髯は唯一的な特徴で継承され、欠くことのできない要素である。現在残っている関帝像のひげは鬚（あごひげ）、髭（くちひげ）、髯（ほおひげ）のすべてが長く、五筋のひげが一般的である。図２から図６の金元時代の関帝像のひげはすでに五筋のひげになっている。それに比べて大興寺関帝像は、長いとも言えず、一筋あるのみである。どちらも一般的な関羽像のひげとは大きく異なり、もっとも着目すべき点であると考える。

上述のように、大興寺関帝像の服装は元代の服飾の特徴を持っているが、一般的な関帝像の容貌とはかなり違っている。現存最古関帝図は金代の「義勇武安王位」図（図２）とされるが、明清以降の関羽形象と同様の姿であり、さらに『三国平話』や『捜神広記』でもほぼ同様である。ただ、元代に中国から求めてきたと言われる大興寺関帝像だけはだいぶ様相が異なるため、不思議である。

五　大興寺関帝像以外の特徴

1　脇侍と武器

現在の関帝廟に行けば、中心に赤い顔の関羽、左右脇侍は黒い顔に青竜偃月刀を持つ周倉と白い顔に印綬の包を捧げ持つ関平という組み合わせが決まっている。しかし、元代では関帝の脇士はどうなっているか、諸々の指摘がある。二階堂氏は『関帝信仰と周倉』において、周倉について次のように論述する[31)]。

> 「関帝祠中、皆塑周将軍、其名則不見于史伝。考元魯貞『漢寿亭侯廟碑』已有乗赤兎兮、従周倉語。則其来已久矣。」と紀昀が『閲微草堂筆記』にて論ずる所によれば、すでに元の時代には周倉が関帝の脇侍として定着していることが判明する。……周倉の場合は、明代にはもう関帝廟において普遍的な存在となっていたため、これを欠くことは考えられなかったのであろう。

関帝の脇士が周倉と関平であることは元の時代に定着し、明代以降、関帝廟のスタンダードになっているということである。金代の「義勇武安王位」図からみると、関羽の後ろに三人が立っており、左は印綬を捧げ持ち、真ん中は「関」字が書かれた戦旗を持ち、右は大刀を持つ。清代以降の関帝の脇士は左側には周倉、右側には関平という組み合わせが大部分であるが、この「義勇武安王位」図では脇士の位置は逆なのである。金の時代は周倉が脇士としてまだ出ていないため、後ろの脇士の位置もまだ定着していなかったのであろう。二階堂氏は「関帝信仰と周倉」で指摘している[32)]。

> 元の雑劇を見ても、関羽に従う者は関平であるのが一般的である。『単刀会』に周倉が出ているのは間違いないが、その他の雑劇では稀である。そもそも『単刀会』自体が、元刊本ではかなり内容が異なっている。『大破蚩尤』雑劇などでも、周倉はほとんど登場することはない。これらの点を考慮に入れると、やはり元以前の時期は、関帝の配下神としての周倉はまだ確立していなかったのでは

31）二階堂善弘「関帝信仰と周倉」（『関西大学東西学術研究所紀要』47巻）71-85頁。

32）前掲　二階堂善弘「関帝信仰と周倉」81頁。

ないかと想定できる。

大興寺の関帝の脇士の位置は「義勇武安王位」図と一致しているが、持ちものは少し疑わしい。まず、図９と図10を確認すると、後ろ右側の人物が持っている兵器は一目瞭然で青竜偃月刀でなく、月牙を水平方向に二枚取り付けた方天画戟の形状と似ている。『三国志演義』では、方天画戟は呂布の武器として描いているが、正史には登場しなかった。また、小説『水滸伝』では呂布に傾倒した呂方をはじめ多数の人物の武器として登場した。ただし、関帝の武器であれば、方天画戟が出現することはない。関羽愛用の青龍偃月刀については丘振声氏の論考によれば、[33]

> 『三国志』関羽伝のどこを見ても、「刀」という字は一字もない。彼が使っていたのは「矛」か「鉾」（ともに敵を刺す武器）のたぐいだったらしい。（略）関羽の「大刀」はどこから生まれたのだろうか、それは講釈師から贈られたものである。宋代・周密の『癸辛雑識続集』に掲載されている龔聖與の『宋江三十六人讃」に「大刀関勝、豈雲長孫。雲長義勇、汝其后昆」の文字が見える。これからすると、関羽が大刀を使いこなすという伝説は、宋代のときにすでにあったことになる。元代の『三国志平話』では関羽が大刀で戦うようになる。羅貫中の『三国志演義』になると、第一回の「桃園に宴し、三豪傑、義を結ぶ」の中で劉備は鍛冶屋に命じて雌雄一対の剣を打たせ、雲長は重さ八十二斤、又の名を「冷艶鋸」という青竜偃月刀を造らせたことを記している。

と説明がある。宋の時代から、関羽の武器といえば青竜偃月刀であることとなり、元代に定着してきた。

また、図11を参照すると、左側に立っている人物は現在は何も持っていないが、このポーズなら何かしら大きな武器を持っていると予測される。那波利貞氏は「帝像は冠服姿にして脇士両像、其一は長刀を、他の一は鎗を持したる立像、三軀共に彩色絢爛たるものなりという」[34] と指摘している。その左に立っている脇士は元々長刀を持っていたが、現在は遺失した可能性が高い。ただし、現在まで伝えられている関帝図や関帝像には関帝の脇士二人が武器を手にする画像はどこにも残っていない。伝承によれば大興寺の脇士は関羽の子の「関平立像」と「関興（周倉）立像」らしいが、以上の分析によれば、根拠づけるものにならない。後ろに立っている脇士は関平と関興どちらでもない可能性も考えられる。

図９　方天画戟

図10　青龍偃月刀

33）丘振声著　村山孚訳『三国志縦横談』（文唱堂印刷、1990年）112-114頁。

34）那波利貞「道教の日本国への流伝に就きて」（野口鉄郎編『選集道教と日本』第１巻・雄山閣1996年）127頁。

図11　大興寺関帝像の脇士

2　扁額

大興寺のパンフレットによると、関帝像には「関帝」と刻まれた扁額が付属している。伝承によれば関帝像と一緒に取り寄せたそうであるが、尊氏の時代は中国の元の末期とのことである。その頃はまだ「関帝」という称号は与えられていなかった。表１のように関羽は侯から公、王を経て、代々の国家から封号を追贈されており、ついには帝まで上昇していたが、関羽が初めて「帝」となったのは明の万暦帝が贈った「協天大帝」「三界伏魔大帝神威遠震天尊関聖帝君」の時であった。元代であれば、まだ「顕霊義勇武安英済王」の爵諡であったため、パンフレットに記される「「関帝」の扁額があり、「南宋武幹謹書」と刻まれているという。」とは少なくとも、明代以降のことであろう。伝承によれば江戸時代、像の横に関帝籤を置いて宣伝していた時期があるそうなので、そのタイミングで作ったものなのかもしれない。二階堂氏はこのことについて、「這個不是“南宋”，這個字様是“南窗”才對。“南 窗”就是日本江戸時代書家武村南窗的號。（これは「南宋」ではなく、「南窗」である。「南窗」は日本江戸時代書家である武村南窗の号である）」[35] と述べた。

終わりに

元末明初の恕中無慍記（1309-1386）の記録、室町時代の臨済宗僧侶蘭坡景茝（1419～1501）が書いた詩文集と江戸時代中期の『山城名勝志』の記載からみると、大興寺で関帝が祀られていたことは事実であると思う。しかし、その関羽像は尊氏が中国から引き取ったものか、宋代の貿易船で舶来されたものか、明確な記録が残されていないため、判断を下すことはできない。

ただし、関帝像の像高が８寸すなわち24.2センチメートルしかなく、普通の関帝廟の関帝像や寺院の伽藍神よりかなり小さい。その大きさの神像は家や船の神棚のような狭い空間で安置されることはもっと合理的であると思う。それは宋代の貿易船で安置された守護神であったか、船主が家にあった守護神

35）前掲　二階堂善弘「關公與足利尊氏」178-181頁。

を携帯してきた可能性が高い。関羽像が日本に運送された後、関羽画や関羽の霊異伝説や物語などの流行につれ、商人、武将、禅僧の間に広がっていった。南北朝の戦乱期に武神・戦神として武将に祀られ、最後に尊氏の手に渡ったのだろうか。

それに、元代の関帝形象は説話、志怪小説、雑劇、元曲などのような文学作品、特に『三国志平話』、『三国志演義』の流行につれ定着してきたが、元末時代に当たる足利氏が中国から求めてきたと言われる大興寺関帝像自体から見れば、中国元代の関帝の形象とは大分異なっている。神像の服装は確かに元代の服飾の特徴を持っているが、容貌（目、ひげ、顔）の面からみるとかなり違っている。後ろの脇士は誰か判断しづらく、持つ武器も不可解である。「関帝」の扁額も関帝籤も江戸時代以降に置かれた可能性が高い。

大興寺の歴史を顧みると、室町時代の応仁・文明の乱（1467-1477）で堂宇は焼失し、以後荒廃したといい、桃山時代の1573年に、織田信長の上京焼討に際して焼失したそうである。さらに、江戸時代の1675年と1692年に京極大火により焼失したということから考えると、現在大興寺に安置している木造の関帝像は当初のものであるかどうかは不明である。その関帝像は火事の後で再造した可能性もある。情報の流通がまだ発達していなかった中近世において『山城名勝志』のような記録により再造したが、それらの記録には関帝の容貌が詳しく記されてなかったため、元の将軍の姿で造ったのだろうか。